

専門教育1： 臨床と研究の対話について考える

中山健夫¹、今中美栄²、上嶋悦子³、
スリングスピーB T⁴、平出 敦⁵

1. 京都大学大学院医学研究科健康情報学
2. 京都大学大学院医学研究科／京都大学保健管理センター
3. 大阪大学大学院薬学研究科附属実践薬学教育研究センター
4. 京都大学大学院医学研究科
5. 近畿大学医学部附属病院救急診療部 (ER 部)

抄録

近年、さまざまな医療・健康関連の専門職にとって、コミュニケーション能力が不可欠の技能として、その能力向上が強く求められている。望ましいコミュニケーションの在り方の科学的な検討は緒に就いたばかりであるが、徐々に量的・質的な方法が発展しつつある。臨床におけるコミュニケーションが研究対象となることで、望ましい医療・保健領域のコミュニケーションの特性が明らかにされ、その成果がプロフェッショナリズムの視点から医療・健康専門職の教育プログラムに体系化されるという一貫した取り組みの実現が望まれる。

キーワード：

1. はじめに

近年、さまざまな医療・健康関連の専門職にとって、コミュニケーション能力は不可欠の専門的技能として、その向上が強く求められている。本稿ではシンポジウムで報告を頂いた、さまざまな医療・健康関連の専門職の取り組みを通して、医療・健康領域におけるコミュニケーションの実践と教育、そして研究の現状と課題、今後の方針性を考える手がかりを提示したい。

2. 専門教育における臨床と研究の対話

2.1 自主的な行動変容を促すためのウェブ集団支援システムの開発：臨床栄養学の試み

メタボリックシンドロームに対する保健指導において、管理栄養士は専門職として対象者の食生活を始め、日常行動などの生活習慣の変容を促すことが求められる。保健指導では、積極的な医療的介入の前に、対象者自らの気づきによる生活習慣改善へ

の自主的な行動変容をサポートするコミュニケーション技術が必要となる。指導方法としては面談による個人指導が有効とされているが、時間や場所などの拘束もあり、個人指導を継続することは容易ではない。

この面談指導に代わるものとして、ITによるコミュニケーションツールとして、ウェブや E-mail を活用した保健指導が考えられる。これらは時間や場所などの制約を受けないなどのメリットがある一方、声やしぐさなど、対象者を観察する non-verbal communication からの情報を得ることができない。また、E-mail 指導では、きめ細やかな個人指導が可能であるが、Peer support や Group dynamics などの集団指導の利点を活かすことは困難である。ウェブ指導では、チャットなどのグループコミュニケーションは図れるが、1 人ひとりへのきめ細やかな個人指導は難しい。

これら、集団指導と個人指導のメリットを活かした、他者の情報が共有できる環境で減量指導を行う「ウェブ集団支援システム」を開発した。本システムを用いたメタボリックシンドローム改善を目的とした無作為化比較試験を実施した結果、Web 上の集団支援でも Group dynamics が生じ得ること、比較群よりも有意に多い体重減少を実現できることを実証した。課題としては、初動時の積極性にグループ全体が左右される傾向がみられることが見出された。今後、参加者のフィードバックを解析し、本プログラムの汎用性を高めるための改善に取り組みたい。

2.2 医療薬学とヘルスコミュニケーション

2006 年 4 月より、薬学 6 年制が開始され、

新しい教育制度のもとで教育を受けた薬学出身者が臨床で活躍することにより、臨床薬学の新たな展開が期待されている。6 年制薬学教育では特に、従来の知識偏重教育を脱し、知識のみならず、技能、態度の 3 者のバランスのとれた薬剤師養成を目指しており、中でもコミュニケーション教育が重視されている。

米国ヘルシーピープル 2010 によると、“ヘルスコミュニケーションのゴールとは、コミュニケーション方略を用いて、健康を改善すること”とされている。また、効果的なコミュニケーションの特徴として、正確で、役に立ち、偏っておらず、矛盾がなく、科学的根拠に基づき、広範に広めることができ、確実に信用でき、タイムリーで、わかりやすく、繰り返し伝えることが挙げられおり、まさに、目指すべき臨床薬学の実践そのものといつても過言ではない。しかし、だからこそ、伝えるべき情報の吟味を行える確かな知識と分析力を高め、伝えるべき時に正しく伝えることができるコミュニケーション力を鍛えることが求められる。それは、より複雑化、高度化する薬物療法の専門家として薬剤師がチーム医療の一翼を担うため、患者、家族、他の医療職と適切な関係を構築するための能力であり、専門的技能と言える。さらに、根拠に基づく良好なコミュニケーションは新たな研究の原動力ともなりうる。今後、国内の薬学部・大学院薬学研究科におけるコミュニケーションを基盤とした医療薬学教育の一層の充実が期待される。

2.3 臨床と研究における医療プロフェッショナリズム

臨床や研究には有効なコミュニケーション

ンは必要不可欠である。そのコミュニケーションの背後にあるのは、医療プロフェッショナリズムである。医療プロフェッショナリズムは、能力、コミュニケーションスキル、倫理的理義及び法的理義の基盤を通して示され、そのうえにプロフェッショナリズムの原則への希求とその賢明な適用、すなわち卓越性、ヒューマニズム、説明責任、利他主義が構築される。また、医療プロフェッショナリズムの「医療」とは、臨床のみならず研究・国際保健・医療政策といった医療にかかわる全ての領域との意味合いが含意される。今後、研究医と臨床医が学際的なアプローチをもって実験室での発見を臨床現場に適応するトランスレーショナル・リサーチが増える中で、有効なコミュニケーションと医療プロフェッショナリズムがますます重要とされるであろう。

2.4 医学部におけるコミュニケーションへの新しいアプローチ

医療面接におけるコミュニケーションスキルの学習は、卒前の臨床実習前の技能試験として全国の医学および薬学の大学にとりいれられた結果、急速に普及した。臨床におけるコミュニケーションのとらえ方は、この10年間に医学教育を受けた医師と、それ以前の医師とでは格段に異なるといわれる。ただし、こうした教育の内容が、ステレオタイプで表層的ではないかという指摘が、常に、なされている。

医療におけるコミュニケーションの教育の内容が表層的になるという危険性は、一つは、研究的なアプローチが不十分であるからである。また専門として研究対象にする人も少ない。したがって、教育の内容は、欧米で構築されたコミュニケーションスキ

ルの体系を教条的に盛り込んだものとなりがちであり、オリジナルな工夫や検討も限られたものとなる。関係者の片手間の仕事として、本腰を入れた検証や評価が行われにくい状況といえる。

近年、臨床におけるコミュニケーションの特徴を明らかにするひとつのツールとして、RIAS (Roter Interaction Analysis System) の利用が広がりつつある。これは、医療におけるコミュニケーションの内容を逐次コーディングして、その内容を分類し、解析するものである。たとえば、学生の面接を評価する際に、評価者による評価が高かった面接と低かった面接は、どのように特徴づけられるか、分析することができる。また、医療安全の授業の中で、患者に対して有害事象がおこった場合、患者や家族に対する説明の仕方や姿勢を客観化するツールとしても、活用できる可能性がある。コーディングは、情報の受け渡しに関する発話と、情緒に関する発話と分けて行っており、模擬患者の満足度との関連が解析できるからである。こうした研究は、臨床におけるパフォーマンスに基づく評価といった視点からも発展性が期待されるアプローチではないかと考えられる。今後、医療コミュニケーションの実証的研究を推進する手がかりの一つとして RIAS の長所と限界が理解され、適切に活用されることが期待される。

3. 考察

臨床現場でのさまざまなコミュニケーションを研究対象としていくため、量的・質的方法、さらに両者の組み合わせによる方

法など、それぞれの長所と限界を踏まえた検討が必要とされる。臨床におけるコミュニケーションが研究対象となることで、望ましい医療・保健領域のコミュニケーションの特性が明らかにされ、その成果がプロフェッショナリズムの視点から医療・健康専門職の教育プログラムに体系化されるという一貫した取り組みの実現が望まれる。

参考文献

- ・ 安藤昌彦, 今中美栄, 増谷友江, 西邑周子, 古谷尚子, 畑尾亜紀, 高山宏江, 秋丸明子, 井上育子, 奥藤美智子, 石見拓, 阪上優, 後藤雅史, 武本一美, 川村孝. 保健指導の有効性に関する、ウェブシステムによるグループ支援と電子メールによる個別支援の無作為化比較試験. CAMPUS HEALTH. 2010;47(1):140-141
- ・ 今中美栄、坂本裕子他、栄養士のための栄養指導論. 化学同人社 藤岡由夫、今中美栄他、Nブックス 疾病の成り立ち—臨床医学一. 建帛社
- ・ 新井節男、竹中晃二、山田富美雄、今中美栄他. 現代ストレス学. 信山社. 1992 年.
- ・ 竹中晃二、今中美栄他 監訳. ガイドブックストレスマネジメント. 信山社. 1995 年
- ・ 上島悦子編著, 黒川信夫監修. 薬学的管理実践のためのエッセンシャルシートとフォローアップシート前編. 医薬ジャーナル社, 2006 年
- ・ 上島悦子編著, 黒川信夫監修. 薬学的管理実践のためのエッセンシャルシートとフォローアップシート後編. 医薬ジャーナル社, 2007 年
- ・ 上島悦子. 臨床薬学エッセンシャル～臨床薬学は何を目指そうとしているのか～欧米と日本の臨床薬学のエポックと今日の臨床薬学. 医薬ジャーナル 2010;46(7):1866-1871.
- ・ デヴィット・トマス・スター編. 医療プロフェッショナリズムを測定する—効果的な医学教育をめざして. 慶應義塾大学出版会, 2011 年
- ・ Kubota Y, Yano Y, Takada K, Seki S, Maeda Y, Sakuma M, Morimoto T, Akaike A, Hiraide A. Analyses of communication-skills in OSCE for pharmaceutical students using Roter interaction analysis system (RIAS). Medical Teacher 2009; 12(Supl 2)
- ・ 齋田愛恵、矢野義孝、関進、高田香織、作間未織、森本剛、平出敦. 薬学 OSCE における情報収集能力の評価に関する検討. 医学教育 2010;41(4):273-279
- ・ Kubota Y, Yano Y, Seki S, Takada K, Sakuma M, Morimoto T, Akaike A, Hiraide A. Assessment of pharmacy students' communication competence using the Roter Interaction Analysis System during objective structured clinical examinations. Am J Pharm Educ 2011;75:43